

## 爆訪につぼん

写真は朝日新聞 12 月 22 日夕刊。乱れるマナー もはや「公害」などと。大阪でもよく見られる「風景」であり、ひとつの社会問題になってきている。抜粋して紹介したい。

リードから一観光地に押し寄せるインバウンド（訪日外国人客）が混雑に拍車をかけ、マナー面などの問題をもたらした。訪日客は今年、初めて年 3 千万人を突破し、今後も増える見込みだ。問題を放置すれば、住民の暮らしに影を落とし、観光地としての魅力も下がる。迎え入れる地域といかに調和していくかが課題だ。

400 年の歴史を持ち、「京の台所」と呼ばれる錦市場（京都市）。全長約 400 ㍎。道幅約 3.5 ㍎の通りに、京野菜など 120 店余りが軒を連ねる。歩きながらの飲食はご遠慮ください。日本語のほか英語、中国語、韓国語によるイラスト付きのステッカーが 10 月、登場した。肩がぶつかり合うほどの通りでは、数年前から串にさした魚介や総菜の食べ歩きが流行。持ち帰り用の食品から出たごみの「ポイ捨て」も目立ち、京都錦市場商店街振興組合が「食べ歩きの自粛」の要請に踏み切った。

にぎわいは観光地にプラスだが、地域の許容を超える観光客が殺到すると新たな問題を迫られる。「観光公害」「オーバーツーリズム（観光過剰）」などと指摘され、人気の観光地で目立ち始めている。京都市の「竹林の散策路」では竹への落書きが問題となった。管理会社が、落書きを削り消した跡に緑色のテープを貼った。北海道美瑛町でも観光客に畑が荒らされるなどしたため、「哲学の木」で親しまれたポプラがやむなく倒された。金沢市の近江町市場では、観光客の急増で地元客が遠のいてしまい、対応に追われる。鹿児島県瀬戸内町で昨年末、クルーズ船の誘致に絡んで「自然が破壊される」などと反対運動が起き、話し合いが続く。

今年の訪日客は過去最多の 3 千万人超。政府はさらに 2020 年に 4 千万人、30 年には 6 千万人をめざす。6 千万人なら、フランスやスペインなどに次ぐ規模で、住民や地域との摩擦を減らす取り組みは欠かせない。

海外の観光地も観光公害に悩む。パリやローマなどではデモが起きた。タイやフィリピンの人気ビーチは今年、水質汚染などを理由に観光客の立ち入りを一時禁止にするなどした。アムステルダムは、観光客の抑制にかじを切り、中心部でのホテル建設などを原則禁じた。ベネチア（イタリア）の本島は、季節によっては人口を上回る観光客が来るようになり、中心部への大型クルーズ船の停泊規制などを強化した。対策を怠れば、住民の不満が高まるだけでなく、観光客の満足度も下がるためだ。



(2019 年 1 月 5 日)